# 「食堂」開設 居場所に

## 子どもと貧困

2016 参院選

子どもの貧困問題が深刻化している。その対策は待ったなしだ。県内でも子どものために支援を始める動きが出ている。

みんなの食堂の食卓風景。この日のメインメニューは手作りギョーザ＝越前市平出1丁目

## 支援活動 賛同広がる

5月中旬、越前市平出1丁目の野尻医院に併設された「みんなの食堂」。午後5時すぎになると、学校帰りの子どもたち数人が姿を見せた。この日のメニューは竹の子ご飯、煮物、手作りギョーザ、ホウレン草のおひたし、サラダ、みそ汁、デザート。食卓に箸や皿を並べ、料理を作るボランティアの女性たちを手伝った。

経済的な事情で食事をとれなかったり、独りで夕食をとっていたりする子どもたちに無料もしくは安い価格で食事を提供する「子ども食堂」として、4月にスタート。福祉や医療の関係者らでつくる実行委員会が運営し、毎月第2、4水曜日に開設している。

高校生以下は無料。大人にも300円で食事を提供する。活動への賛同は広がり、食材は地元の企業や農家から寄付を受けている。

6月までに計5回開設され、小学生から80代の高齢者まで延べ193人が利用した。「困窮した家庭の子どもが対象というイメージを払拭したい。おしゃべりしたいお年寄りや、両親が残業で食事をとれない子どもなど、いろんな人の居場所にしたい」。「みんなの食堂」という名前に込めた思いを、事務局の野尻富美さん(47)は説明する。

県内では同様の子ども食堂が敦賀市（こども食堂青空）、あわら市（こども食堂まる）、鯖江市（ゆるい食堂）にも開設。また、有志の料理店主らが「ふくい子ども食堂」と称し、各店が持ち回りで、子どものために食堂を開いている。

◇　◇

子どもの貧困の背景にあるのが、保護者の経済的な環境の厳しさだ。山形大学の戸室健作准教授の研究によると、子育て世帯のうち収入が生活保護基準以下の割合は、2012年で全国平均13・8％。福井は5・5％で47都道府県の中で最も低かった。

祖父母、両親、孫の3世代同居が多い福井では、子育てに多くの支援を得られやすい。一方、支援が得られにくい子どもたちには、生きづらさも感じやすい。

越前市行松町の児童養護施設「一陽」。入所する39人の子どもの多くは、保護者の病気や失業、離婚を背景とした貧困に苦しむ家庭の出身だ。

統括所長の橋本達昌さん(49)によると、以前は、ゴールデンウィークやお盆休み、年末年始になると、ほとんどの子どもが家に一時帰宅していた。しかし、現在は半数以上が施設に残る。また帰っても1泊程度で戻ってくる。非正規労働者の父母や、低収入を補うためにダブルワークに追われるひとり親が多い。土日や夜も働き、子どもと過ごす時間がないからだ。

苦境にある子どもたちと接していると、世代を超えた人たちが集う「子ども食堂」の活動に橋本さんの期待は高まる。「社会的な孤立にさらされている子どもたちの居場所として、食堂が育つような社会の雰囲気づくりを政治が後押ししてほしい」

（山本潤子）

7/3 朝日